

説教 『 わが罪は常にわが前にあり 』

小河信一 牧師

詩編51編 1節～21節

ある教会では、礼拝の中の交読文として、この詩編51が毎主日変わることなく用いられています。

詩編51は、悔い改めをもって礼拝を始めるにふさわしい内容・形式を有しています（他に詩編31、130）。これは詩編を代表する詩編であり、詩編の至宝しほうとも呼ぶことができるでしょう。実際、ロイド・ネービーという旧約学者は、「詩編51にはよみがえりまでは記されていないが、罪、悔い改め、清め、献身が描かれているゆえに、詩編の女王と名付けられよう」と述べています。

私たちは、毎月一度の詩編の講解説教を通じ、聖書の読み方について霊的な洞察が与えられるようにと願い求めています。これまでに、神の霊の導きにより教えられた〈詩編の読み方〉の主要な点を整理してみましょう。

①詩編19

詩編を読む、あるいは、詩編に耳を傾けるということは、聖霊に導かれるということに限りなく近いと言える。

もともと詩編は、神の霊が宿った御言葉または祈りである。

聖霊の導きを求めている信仰者にとって、詩編を読むことは、その点で大いに助けられる。

言うまでもなく、詩編を読めば、自動的に、聖霊の導きにあずかれるというわけではない。

②詩編22

詩編を通して、イエス・キリストの出来事を思い起こす。

詩編を読んで、福音を思い起こし、確かめる。

詩編を通して、すなわち、聖霊に導かれることにより、キリストへの集中が高められる。

目標に向かって前へ進む力、神に近づく力が注ぎ込まれる。

③詩編23と34と42

日々の聖書通読・黙想や説教において、詩編の詩の流れに即して読む。

本来、詩が持っている流れの力…展開…にそって読む。
その詩編の初めから終わりまでを、流れに沿って読む。

④詩編46

御言葉と御言葉との響き合いに下に、耳を澄ます。^{もと}

例えば、詩編1:1,3「川の流れのほとりでの幸いなる人々の生活」と詩編46:5「神の都に流れ、喜びをもたらす川」は響き合っている。すなわち、今の私たちの「幸いなる生活」は、永遠の命の水の流れる神の国の生活を目指すものである、と示される。

さらに、共鳴する二つの御言葉から、第三の御言葉（ヨハネの黙示録22:2）が想起されてくる。

反響する御言葉を通して、神の御心がより深くより豊かに、私たちに知らしめられる。

私たちは、共鳴し反響する御言葉の美しさや激しさに圧倒され、私たちの悪しき思いや考えを割り込ませる余地を失う。

聖書の至宝、詩編51は、以上の〈詩編の読み方〉①～④を踏まえ、静かに黙想し深く洞察すべきものです。それでは、初めから終わりまで、流れに即して詩編51を読みましょう。

今、詩編の「流れ」と言いましたが、実は、この詩編は冒頭 51:1-3からいきなり最高潮に達しています。

それを読み手が受け止めるには、第一に、聖霊の導きを求めなければなりません。ここでは、「最高潮」の有り様を詩句の技巧や内容の連係などを吟味しながら捉えることにしましょう。

一口でその内容を言えば、「わたしの罪」の前に立つダビデあるいは詩人（51:1-2）は、神の憐れみに自らをゆだねきっている（51:3）ということです。

詩編51:2では、「わたしの罪」の前に立つということが、聖書の有名な出来事（サムエル記下11章－12章）を背景にして描き出されています。

詩編51:1-2――

¹ 指揮者によって。賛歌。ダビデの詩。

² ダビデがバト・シェバと通じた（～へ入った・～に来た）ので（英訳：after「後に」）預言者ナタンがダビデのもとに来た（～へ入った）とき。

詩編51:2では、「入る。来る」という同一の動詞が繰り返されています。一方、人が罪に入った、他方、その後（直後に！）、神の人が来た、ということです。

言い換えれば、人が罪を犯した時、ただちに神の介入があったということが、「聖書の有名な出来事」であり、同時に、聖書の物語や詩の多くが、繰り返し、この経緯を伝えている（例えば使徒言行録9章の「サウロの回心」）と見なされます。

そのことは、人々が罪の罠^{わな}に陥った、するとただちに、主イエスが来られた、私たちに近づかれた、という新約の使信に至るまで不変の、神と人との出来事です。ただ、私たちは心に覆い^{おお}がかぶさると、迅速な、より正確には、常時の神の介入に気が付かなくなります。

カルヴァンは、51:2の「入る。来る」という語の反復を注視しながら、暗々裡にある人と神（＝預言者ナタン）との対比を描いています。

ダビデがバト・シェバのもとに「入った」後（after）、預言者ナタンがダビデのところへ「入った」、あるいは「来た」と言われている。

ダビデはこのような邪悪な接近によって、実は神のもとから遠く離れ去ったのであった。

それ故に、この哀れ^{あわ}なならず者、また放蕩者を連れ戻すため、ダビデが未だはるか遠く離れているときに（参照：ローマ5:8）、ダビデに対して、神がその御手を差し伸べられた、ということのうちに、神の慈愛はいっそうあらわに照り輝いているのである。

さてここで、私たちが、罪なる暗がりの方へ「入った」まま、失踪^{しっそう}するか、あるいは、罪に陥ったことを悔い改めて、この罪深い者のそばに「入った・来た・近づいた」神の愛にお応えするか、つまり、罪と死の道を突き進むか、あるいは、まことの命の道へ立ち帰るかが、私たちに問われています。

間髪^いを容れず、詩人は後者の道をたどりました。詩編の読み手である私たちが気の付かないほど、速やかに、潔く、神に立ち帰っています。全身全霊を神にゆだねています。これが、詩編の「最高潮」と称した所以^{ゆえん}です。それに比べれば、自分の何と優柔不断な有り様でしょう。

詩編51:3――

神よ、わたしを憐れんでください

御慈しみをもって。

深い御憐れみをもって

背きの罪をぬぐってください。

詩の本編の冒頭において、ダビデあるいは詩人が、神に立ち帰ったこと、神の御前に悔い改め

たことが、詩的な言葉によってほとぼり出ています。

詩人は、神の「憐れみ」を叫び求めています。自分は、「死刑に当たるような罪を犯した者です。もはや知恵や力や富を頼りにしません。このような者ですが、御前に祈ります。どうか、この者を清め、憐れみをお与えください」と、救い主なる神に願っています。

このようにいっさいの妥協を許さない、全き悔い改めは、詩人の言葉・告白に聖霊が宿っている証拠です。詩人が、罪のどん底において、神への立ち帰りの基において、「自力」ではなく、聖霊の働きを受けていることが、詩編51の初めに開示されています。私たちは、神と人との幸いなる関係を示されて、深く慰められます。

詩編51:5-6——

- 5 あなたに背いたことをわたしは知っています。
わたしの罪は常にわたしの前に置かれています。
- 6 あなたに、あなたのみ^にわたしは罪を犯し
御目に悪事と見られることをしました。
あなたの言われることは正しく
あなたの裁きに誤りはありません。

詩編51:5は、私の罪を直視している、つまり、私の罪から目を逸^そらしていないことを、神に告白しています。この詩行は、夏目漱石の小説『三四郎』に引用されています。ただ注目すべきは、詩編51:5から51:6への展開です。

詩人は、自分の罪を見据えています。それだけでは何の救いもありません。自己嫌悪に陥る可能性が高いでしょう。

私と私の前に置かれている罪——そのような暗黒の状態を見守っておられる神の臨在しておられることに、私が気が付くかどうか、です。この詩編の冒頭に開示された聖霊の導きは、確かに貫かれていました。

臨在しておられる神に対する詩人の懺悔^{ざんげ}、「あなたに、あなたのみ^にわたしは罪を犯した」は、「あなた」なる神に対する「わたし」の真摯な向き合い方……いわゆる「我」と「汝」の関係……を証ししています。聖霊に導かれている信仰者の言葉にほかなりません。

このように明確に罪を認識した者に対し、神は介入され、「我は汝を罪に定めない」（ヨハネ8:10-11、ローマ8:1,34、詩編34:23）と宣言してくださいます。

イザヤ書38:17——

あなた（＝神）はわたしの罪をすべて

あなたの後ろに投げ捨ててくださった。

ここで疑問が浮かぶかもしれません。詩人がダビデだとすれば、彼は「あなた（神）のみに」ではなく、（姦淫の罪を犯した当の相手である）バト・シェバやその夫ウリヤに罪を犯した、と告白しなければ不十分ではないかとの、指摘は重要です。自分の罪なる業によって、危害を与えてしまった人間についての、目配り・心配りは無くてもよいのか、という疑問です。

それに対する回答としては、この詩編の通りに、第一には、神に対して罪を告白すること、その際、神は私たちの罪を照らしてくださり、神及び人に対する最善の悔い改めと和解の道を備えてくださる、ということです。コリントの信徒への手紙 二 3:16「しかし、主の方に向き直れば、覆いは取り去られます」とある通り、もろもろの罪を含めた、私たちの世界全体が明るみに出されます。まことに畏れ多いことです。

決して忘れてはならないのは、「あなた」なる神の御前から、「あなたたち」なる隣人との礼拝及び日常生活へと至らない「私」の悔い改めは、本当の悔い改めではないということです。主イエスご自身、神礼拝と兄弟・姉妹との日常生活が結び付かない「不十分な・偽りの」悔い改めを見抜いて警告しておられます。

マタイ福音書5:23-25――

²³ だから、あなたが祭壇に供え物を献げようとし、兄弟が自分に反感を持っているのをそこで思い出したなら、²⁴ その供え物を祭壇の前に置き、まず行って兄弟と仲直りをし、それから帰って来て、供え物を献げなさい。²⁵ あなたを訴える人と一緒に道を行く場合、途中で早く和解しなさい。さもないと、その人はあなたを裁判官に引き渡し、裁判官は下役に引き渡し、あなたは牢に投げ込まれるにちがいない。

まず「主の方に向き直れば」が出発点であり、その主なる神と私との密接な関係によって、隣人との関係が浮き彫りにされるのです。私たちにとって、それは確かに重荷であり苦しみであるという側面がありますが、根本的に「隣人となる」（ルカ10:36）、隣人の輪を拡げることは、神の大きな恵みです。神の恵みによる新しい隣人との出会いが「隣人とは誰か」という偏狭で固定化した定義付けを崩します。

先に詩編51は、その流れがいきなり最高潮に達している（51:1-3）と解説しました。その冒頭と共に、この詩編の中央部、51:12-14は頂点を成しています。そして、その力強い霊的な流れは、詩編の終わりに向かって、勢いよく流れ下っていきます。

詩編51:12-14——

- 12 神よ、わたしの内に清い心を創造し
新しく確かな霊を授けてください。
- 13 御前からわたしを退けず
あなたの聖なる霊を取り上げないでください。
- 14 御救いの喜びを再びわたしに味わわせ
自由の霊によって支えてください。

詩編の冒頭で、神の憐れみを叫び求めた詩人は、ここに至って、「創造してください、心を」、そして「新しくしてください、霊を」と祈り求めました。

自分の「心」と「霊」が新しくされるということは、自分という人間全体が、また、信仰共同体全体が新しくされるということです。詩人は、主なる神の天地創造の御業を「わたしの内に」呼び起こしつつ、新しい創造によって、罪の汚れを清められ、救われたいと願っています。

神が創り、保たれる新しい力の中に、私たちが永遠に生きたいと願う——神が、私たちのこの切実な願いを、どのように聞き届けてくださったか、いな、私たちの願う前に、神は人間の思いを受け止め、成し遂げてくださったか、〈詩編の読み方〉②「詩編を通して、イエス・キリストの出来事を思い起こす」に即して説き明かしましょう。

神の憐れみが働いて、私たちが「新たに生まれさせられる」（Ⅰペトロ1:23 他にテトス3:5、ヨハネ3:3）という恵みは、主イエス・キリストの復活において成し遂げられました。神が腸^{はらわた}を痛める（「憐れみ」の原意）ような苦難〈十字架〉を通して、御子イエスの内に永遠の命が示されました。

私たちは、その主の復活によって、「心」と「霊」、人間全体が新しくされるという恵みにあずかることができるようになりました。ここで、「新しい」というのは、主の復活によって裏打ちされていることですから、古びることのない、つまり、永遠の命が与えられた、という意味です。

私たちは、新しい命、復活の力に生き続けるために、ひたすら福音の言葉を信じ、主の聖餐にあずかるのです。それによって、神の「救いの喜びを味わわれ、自由の霊によって支えられる」（詩編51:14）という私たちの霊的な生活が守られます。

詩編の中央において預言された〈キリストの復活〉〈キリストの福音〉は、それが〈神の真実〉であることを証しするかのよう、隣人愛・伝道、賛美、そして感謝へと流れわたっていきます。

詩編51:15,17,18-19——

〈隣人愛・伝道〉

15 わたしはあなたの道を教えます
あなたに背いている者に
罪人が御もとに立ち帰るように。

〈賛美〉

17 主よ、わたしの唇を開いてください
この口はあなたの賛美を歌います。

〈感謝〉

18 もしいけにえがあなたに喜ばれ
焼き尽くす献げ物が御旨にかなうのなら
わたしはそれをささげます。
19 しかし、神の求めるいけにえは打ち砕かれた霊。
打ち砕かれ悔いる心を
神よ、あなたは侮られません。

最後には、本来の純粋な詩に対する付加との説もありますが、礼拝所の建設（51:20）と献げ物（51:21）という、地に足の着いた重要な課題が提示されています。

詩人が「自由の霊によって」支配されたとき、これほどまでに美しい形式と勢いある展開を持つ詩が紡ぎ出されるものかと讚嘆するばかりです。何よりも、この詩は、「キリストを目指して」^{つむ}います。